

# 防長産綠釉陶器の基礎的研究

高 橋 照 彦

- 
- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1 研究史           | 4 防長産綠釉陶器の編年     |
| 2 在地土器編年の再検討    | 5 防長地域における綠釉陶器生産 |
| 3 防長産綠釉陶器椀皿類の分類 | 6 結 語            |
- 

## 論文要旨

『延喜民部省式』に年料雜器として掲げられている「長門国瓷器」については、防長産の綠釉陶器であることが明確化してきたものの、いまだ窯跡が発見されておらず、日本古代の施釉陶器生産において最も研究が遅れている対象の一つとなっている。そこで、本稿ではそれらの実相を明らかにするために、基礎的な検討を試みることにした。

まずは準備作業として、大宰府土器編年の実年代観を問題に取り上げ、畿内の編年との齟齬を指摘した。そして、実年代推定資料のより豊富な畿内の年代観を大宰府編年に適用して、検討を進めることにした。次に、消費地出土資料から防長産綠釉陶器を抽出し、その特徴をまとめた。その上で主要器種である椀皿類を分類し、その年代的検討を行い、Ⅰ～Ⅴ期の編年案を示した。

続いて、防長産綠釉陶器をめぐる諸問題に検討を進めた。生産内容では、器形や法量において基本的に東海産綠釉陶器と一致した状況を見て取れ、東海と防長の両地域へ共通の生産内容の規範が伝えられた可能性が高い。ただし、東海産と比較すれば、防長産は在地色が濃厚で、製作手法としてもやや粗雑な観は免れないなどの相違点も見られ、両者の窯業技術水準の差異を反映するものと推測される。

流通状況では、少量ながらも防長産綠釉陶器が畿内まで流入していることが判明した。また、他の産地とは異なり、防長産綠釉陶器が多数を占める消費地は長門周辺に限られ、そこから離れるにしたがい防長産が消滅することが明瞭となった。このことから、防長産綠釉陶器は他の生産地よりもかなり生産量が少なく、その流通体制としても各地に等分で配布されるようなものではないことが明らかである。

最後に生産の展開過程としては、長門において9世紀前半代から10世紀代までその生産が行われ、周防では10世紀頃から生産が開始し、11世紀中頃には生産がほぼ終焉を迎えたものと推測された。